

言語学の潮流

林 栄一・小泉 保 編

言語学の潮流

江苏工业学院图书馆
藏书章

勁草書房

林
榮
二
十
小
泉
保
編

言語学の潮流

1988年4月25日 第1版第1刷発行

1992年4月10日 第1版第5刷発行

◎編者 林 栄一／小泉 保

発行者 八 田 恒 平

発行所 株式会社 勁 草 書 房

〒東京都文京区後楽 2-23-15 振替／東京 5-175253

電話（編集）03-3815-5277（営業）03-3814-6861

FAX 03-3814-6854

- ＊落丁本・乱丁本はお取替いたします。
- ＊定価はカバーに表示してあります。
- ＊無断で本書の全部又は一部の複写・複製を禁じます。

根田印刷・和田製本

Printed in Japan

ISBN4-326-15210-9

目次

第一章	序論	1
第二章	言語研究の夜明け	9
第三章	比較言語学の誕生とその発展	19
第四章	ソシユール理論	39
第五章	構造言語学	53
I ヨーロッパ		
一	ブラーグ学派	53
二	コペンハーゲン学派	66

II アメリカ

一 音素論	77
二 形態論	90
三 統語論	95
四 意味の問題	99

第六章 生成文法

一 統語論	103
二 音韻論	132
三 意味論	152
四 語用論	169

第七章 その他の諸研究

I 言語理論

一 文法素論	191
二 成層文法	200
三 体系文法	209

目 次

参考文献
あとがき

四	モンタギュー文法	222
II	応用言語学	
一	社会言語学	242
二	心理言語学	255
三	対照言語学	270
四	類型論	282
五	記号論	295

第一章 序論

1 言語の本質

言語——コトバ——というものは、考えてみると、実に不思議なものである。人間は誰でも日常コトバを使って生活している。当然すぎて、普通の場合これを意識すらしない。空気や水と同じように、自然に与えられていると思っている。しかし、同一の社会に属していない、たとえば外国人とか異民族の人たちに接すると、互いに話を通じないので、コトバなるものの存在に注意が向けられることになる。言語は空気や水と決して同じものではなく、人間の存在と深くかわっていることに気づくのである。すなわち、空気や水は人間がいなくても純粹に客観的に所与のものとしてあるのだが、コトバは人間と無関係にあるのではない。それは人間に内在するものである。しかし、それは個人のものでなく、個人に共通して客観的に存在するものであることも知らねばならない。

ところが、コトバというものは、物理的な実体として捕捉できるかというと、ことは必ずしも簡単ではない。なるほど音声というものがあって、音声学の対象となる実在であることは否定できないが、それ自体は音波であるにすぎない。また文字が用いられている場合、それは言語の外形として重要な機能を果すものであることは認められるけれども、それ自体は、典型的には紙とインキ（またはそれ

に相当するもの）から成る線条や図形であつて、言語そのものではない。實際上これらがなければ、言語を使うことができないから、言語と密接な関係があることはまちがいないけれども、あくまでもそれは外面的に聴覚視覚によって感知できる顯現体であるにすぎない。

それでは言語の実体はどこにあるのかということになるが、一言でいえば、それは人間の頭の中にある心的実在であると規定できる。すなわち、人間はその圍繞する森羅万象の実在——自分の思惟をも含めて——を客体化する能力を生得的に所有している。これをロゴス (logos) というが、この理性の働きによって、実在界の万物を秩序立て、体系化するのである。それによって、人間は他人はもとより自分自身ともコミュニケーションが可能となる。これは他の動物の能力とは隔絶した極めて高度なものでフンボルト (W. Humboldt) が「人間は、ただ、コトバによってのみ人間である」と言ったのは、けだし至言であると申してよい。なぜなら、他の動物の場合は、程度の差はあるにせよ、概して即物的ないし場面的な第一次信号にすぎないのに対し、人間のコトバはパブロフ (I. P. Pavlov) のいわゆる第二信号系を形成し、抽象的な内容を時間空間を超えて伝えることができるからである。自分に対しては内省的な手段ともなる。

どうしてこのようなことが可能になったのかを、コトバの成立というところで考えてみよう。外界は客観的に存在しているだけであるが、これを絵画に描く場合は、画家が自分の世界を外界を素材として創造している。これと同じく、人間は物的心的な外界（自分の思惟も含まれる）を素材として、言語という世界を創造する。言語の起源がどんなものであったか、いつそれが成立したかは定かにはわからない。最古の記録でも六千年くらい前であるから、随分以前のことであり、原始人が最初どのよ

うな形のコトバを使ったか、想像がつかないけれども、恐らく叫び声のようなものから発達したのであろう。そしてその初期には、動物と同じ即物的な段階があったと思われるが、ロゴスをもつ人間は、外在する実体や事象を認識的に秩序立てる能力があるものだから、次第にいけば「分別」による仕分けや整理が進行したはずである。元来実在界は混沌とした連続的無定形のカオス (chaos) であるが、これらが恣意的に切斷され分節 (区切り) されて、非連続的な形式が与えられることになり、コスモス (cosmos) の世界が生ずる。これが言語の成立する基盤であり、ロゴス (理性) の顕現ないし分身としてのロゴス (言語) が、人間の思惟思考と結びついて生まれることになるのである。

ここで言語と思考の關係について触れておく必要があるであらう。最も素朴な考え方は、「コトバと思考とは元来別々のものである。従って、両者が互いに独立して生ずることがありうる」ということで、事実コトバがなくても知覚、直観、場面的判断、推測などの心的活動は行われるし、また思考がなくても叫び声的なものや、いわゆる反響言語なるものは存在することが認められている。しかし、それぞれ一方だけで本当に独立した存在になっているのかどうか、問題なしとしない。次に、両者が不可分で一体化していると説く立場がある。すなわち、思考なくしてコトバなく、コトバなくして思考なし、ということであって、コトバが思考そのもののなのである。従って、「犬」と「ドッグ」とはコトバが異なるのだから、内容的には同じものを必ずしも表わしていない。サピア・ウオーフの仮説 (Sapir-Whorf Hypothesis) は有名であるが、それはこのような考え方に立つもので、「個人の世界観は母語によって決定される」とか「異なった言語の生来の使用は異なった世界像を強制する。」という所説である。極論すれば、「言語が思考を決定する」ことになる。(この二人の学者はすべての点で同じ

意見であつたわけではないし、論述の解釈もいろいろあるようであるが、今は触れないでおく。この議論はある程度首肯される内容をもつていて興味深いが、すべての面をこれで割り切るとはむずかしい。やはり、思考とコトバとは一応別のものであり、それぞれ自律的な世界を構成しているとみるべきであろう。しかし両者は互いに不即不離の關係にあるのであつて、相互依存の機能が両者の間に存在すると考えられる。根本的には、今まで述べてきたように、人間にそなわっているロゴスが、万象を秩序だてるのに即応して言語が形成されたのであつて、知覚・認識の知力が発達するに従つて、思考内容を定着させる工夫があつたのである。コミュニケーションの必要性のためには、分節調音できる人間の音声が使用されるのは、極めて自然なことであり、それに対応する意味内容がセットされることで記号が成立することになったのが、言語の誕生にはかならない。これによって、漠然とした星雲状の思惟が形式化され、概念化が可能になる。すなわち、内容が明確化されるのである。言語が思考を生むのではないけれども、言語によつて思考が明晰になり、またその言語自体を材料として、更に新しい思考が二次三次的に行われるという螺旋的發展も可能である。高次の抽象的議論では、コトバが客体化されコトバがコトバを生むことがよくある。自分自身の思惟思考も言語化された場合は、客体的事象として外在化するから、内省的考察ができるのである。言語なしでは思索ができないというのは、このような事情によるものと思われる。このことは、しかしながら、行き過ぎると、逆に言語が思考を操ることも可能にする。コージブスキー (A. Korzybski) の唱道した「一般意味論」(General Semantics) では、コトバは実体そのものではないことを、繰返し力説して、まちがった価値判断に誘導されないよう警告を発している。それほど思考と言語との關係は密接なのである。

ところで、右のような働きをもつ言語とは、實際はどんな性質をもったものなのであろうか。この問いに対してはいろいろな答があるが、最勝義的には、言語は「記号」であるということになる。記号とは、何かあるものを内容として示す表現体と定義できる。言語の場合、ロゴスによって秩序立てられた、実在界の事象に対する思惟思考が内容となり、それを知覚に訴えて示す音声（または文字）が指示手段となるのが普通である。一般的には、意味をもった音声ということで言語記号の成立がある。ソシュール (E. de Saussure) という学者は、概念と聴覚映像とが結合したものとして、言語を記号学の対象としたのであった。このことについては後で詳しく触れる機会があるが、要するに意味内容と音声表現の二元性が言語の記号性を成就せしめているのである。日本語でイヌという音声とワンワンはえる動物のイメージが結びついて初めて日本語なのであって、その一方が欠落していたら、単なる音響、単なる知覚にすぎず、コトバではない。記号でなければ言語ではないのである。（なお、記号の使用に関しては、複雑な問題があるが、ここでは論ずる余裕がないので割愛する。）

これに関連して述べておかねばならないことが、幾つかある。その第一は、記号の両者の結びつきは全く恣意的であって、何らの必然性も認められないということである。ワンワン吠える動物は「イヌ」でなく「ネコ」と呼んでも差支えないのであって、英語で「ドッグ」と呼んでも同じ動物を示すのを見て、このことは明らかである。ただし、ことはかく簡単ではなく、意味内容とその音声表現とは切っても切れぬつながりがあるという思いこみは、一般の人々の間では根強いものがある。たとえば親が生れたわが子に名をつける場合、やはりよい名をと考えるのが普通であらう。姓名判断が繁昌するのも故なしとしない。呪文などについても同じことがいえる。しかし、これらも一概に荒唐

無稽だと片づけることはできない。というのは、この内容と表現との結合は個人の恣意によって決められるものではなく、個人が属している言語集団に規制されているからである。これが付言事項の第二になるのであるが、言語は社会的規約の中に組込まれていて、特別の場合を除き、個人が勝手に変更したり、創造したりすることは困難で、多少の自由があっても、枠組みの約定や束縛からのがれることはできない。殆どの記号は既に与えられていて、われわれはそれの中でしか生活できないのだから、一旦定められた記号の両因は、一枚の紙の裏表のように変更がきかないのである。とすれば、両者の結びつきは、成立の当初は恣意的であるにせよ、特定の言語集団の中の現実には、必然ということになる。従って「名は体を表わす」わけで、何かことを行う場合、命名ということが、非常に重要なことであるのも、うなずける話である。(古代ギリシアの「ピュセイ・テセイ」論争参照)

2 言語の深層

右に述べたように、言語が実際に機能するには、具体的な記号がなければならないが、それが言語の結構でどんな位置づけをもつかを、考察しておく必要がある。

具体的な記号は、日本語なり英語なりの個別言語のものであるが、個別言語に到達する以前に、人間の言語一般に共通する普遍的な要因があるのであって、それがあればこそ、われわれはいかなる外国語であっても、これを学習して理解・使用ができるのである。本章の前半で、言語成立の基盤を論じたときに述べたように、ロゴスという高次な能力によって、カオスである実在界の事象が秩序立て

られた思惟に即応して言語化されるのであるが、この段階での言語はまだ可能体であって、具体的に個別言語を生むための要因が、いろいろと伏藏されていて、個別言語はそれを選択することになる。しかし、その選択は無制限に自由ということでなく、一定の枠組みがあるはずで、それが言語の最深層をなすと考えられる。大きくいえば、言語を構成する単位的要素としての語彙はどうしても必要で、基本的には実辞（内容語）としては名詞的なものと動詞的なものが当然あるべきであらうし、それらをつなぐ虚辞（形式語）もないわけにはいかないだろう。次に語彙だけではどうにもならないから、それを並べる手段がなければならない。ここで問題になるのは、いわゆる語順である。われわれは時間と空間の中で生活しているのだから、一度に多くのことを述べることは物理的に不可能である。従って、いろいろの要素は順序をきめて一列にしなければものと言えない。言語が外面的には線条性をもつのは当然である。この場合、統語機能から $S \cdot P(V) \cdot O$ という三要素だけを取り出しても、 SPO 、 SOP 、 OSP 、 PSO 、 OPS 、 POS といった順列組合せが可能であるが、そのいずれかが選ばなければならない。また言語によっては、名詞的なものには性数格といった形態や動詞的なものには時制とか叙法とかの規定が加わることもあるし、叙述的には肯定、否定とか平叙、疑問、命令、強調のようなモード的表現も必然的に工夫がこらされよう。これらは一応言語が實際上使用されるための骨格的要因であるが、具体的にどれだけ採用されるかは、個別言語集団の生活環境、社会構造、文化背景等々により異なる。人間が生活するのに、衣食住が必要であるが、それをどの程度調えるかは、それぞれの事情があるから千差万別であるけれども、言語について申せば、右に述べた要因を可能体としては含有していると考えてよい。

同じことが、外的な表示手段として音声についてもいえる。可能性としては、人間が生理的に産出できる音は、随分多様であるが、個別言語としては、その一部を使用しているにすぎない。また同じ音声であっても、個別言語の体系の中では、価値がそれぞれ異なることもありうる。これも一定の枠内における選択の問題であらう。

最後になったが、可能性の中での選択ではあるけれども、全く無制限の自由であることはないのであって、結果的には、人間の言語である限り、言語は有機的な体系をなしていることを指摘しておくべき。言語学はその結構のキャラクターを解明する学問である。攻究すればするほど、絶妙ともいふべき人間の言語の複雑さは、その故の魅力を以て吾人に挑戦してやまないのである。

第二章 言語研究の夜明け

1 古代

言語に関する考察は、言語の発生と共に古いといわれる。従って、言語研究の歴史は、人間の歴史と密接にかかわっている。言語は、既述したように、人間の高次な能力ロゴスに起因すると考えられるが、実にすばらしい所産である。聖書ヨハネ伝の冒頭には、「初めにコトバがあった。コトバは神と共にあった。コトバは神であった。」と述べられている。その神性の故に神との競合が生じ、バベルの塔の悲劇があったわけであるが、それはともかくとして、この不可思議なものを何とか捕捉したいという欲求には熾烈なるものがあった。そのために古代からいろいろな試みがなされたのであるが、それらが明確な形をとるには、ある程度文化が高度なものになる必要があったし、それを促す要因が熟さねばならない。その意味で、インドとギリシアにおいて、言語研究の最初の仕事が開花したのである。前者にあつては、サンスクリットで書かれた經典を正しく理解し継承する宗教上の目的から文典が編まれ、後者にあつては哲学的論理的な関心からの研究がなされ、後代の言語学の基礎を築いたのであった。

(1) インド

インドの言語は、系譜的には印欧語族の中のインド語派のもので、いわゆるヴェーダ語 (Vedic) が古層をなすが、そのうちヒンズー教の経典「ヴェーダ」(Veda) に用いられたのが、古典サンスクリット (Sanskrit, SK) である。しかし、これは早い時期に日常には使用されなくなつて、プラークリット (Prakrit) という、ややくずれた形のものが用いられた。(バーリー語はその方言で、仏典にはこれで書かれたものも多い。)ところが、祭祀や儀式には、発音的にも文法的にも、完全無欠な折目正しい SK によらなければ功徳がないと信じられていたので、これを正確に伝える発音と表記のモデルをもつ必要があつた。そこでヴェーダの中でも最古のもの(紀元前二〇〇〇—一六〇〇頃成立)といわれる讃歌集リグヴェーダ (Rigveda) を主に対象として、戒律集スートラ (Sutra) の形によつて、サンスクリット文典が編まれたのであつた。

この種の文典で一番有名なのがパーニニ (Panini) の *Aṣṭadhyāyī* である。この著者はインド西北部の出身で、紀元前四世紀後半から三世紀前半頃に生存した人物であるといわれるが、もつと以前という説もあり、詳しいことはわからない。パーニニ以前にもいろいろの研究があつたのであるが、それらを踏まえて頂点に立つのがこの文典で、これによつてインドの文法学はその極致に達し、これを凌駕するものは今日に至るまで存在しないといわれる。一応紀元前四世紀頃という古代に作られたこの文典は全く哲学的思弁がなく、すべて実証的記述で、現代の言語学の到達したレベルからみても、むしろ学ぶところが多い驚歎すべき著作である。もちろん、これは徹底した規範文法であるのは、その編纂の趣旨から申して当然であるが、記述の仕方は近代文法の構成とは全く異質で、音韻論・形態

論等を区別してそれぞれの下位区分を作って述べるようなことはなくて、極めて簡潔な規則を羅列したものである。その数は三九七六であるが、省略記号を縦横に駆使しているため、注釈がなければ理解が困難な程凝縮されている。梵字（子音文字が必ず母音を含む音節文字で、四角な形をしている）では一五〇頁程度、ラテン文字で印刷したら一〇〇頁以内におさまるといふ分量であるが、その内容を仔細にみれば老大な情報が入蔵されている。伝承と口述による布教を反映して、音声と表記の諸問題が重要な事項であるため、たとえば連声（れんじょう）（sandhi）といわれる、語が他の語と接するとき、語末音と次の語頭音との間で特別な変化が生ずる現象とか、転声法、語根、格の整理とか、もろもろの問題が取扱われている。また今でいう形態素やゼロ記号の考え方も示されている。

なお、パーニニの文典のほかに、ヴェーダの附属文献としての音声学書や語源字書の類もあって、古代インドの言語学は非常に高度なものがあつた。（仏典と共にわが国に伝わった悉曇（しったん）学は、これらの影響を受けたものである。）パーニニ以後パタンジャリ（Patañjali）（紀元前二世紀の人）など、注釈書を出した文法学者もあるが、特筆するほどの業績は出ていないようである。

(2) ギリシア

ギリシアで言語に関する考察が顕在化してくるのは、大たい紀元前六世紀あたりからで、哲学者・数学者として有名なピタゴラス（Pythagoras）が、事物の名称はその内容から自然に発生するという説をとなえたのが、最も早い時期のものであつた。これはヘラクレイトス（Heraclitos）にも継承され、自然説はピュセイ（Pusei）といわれて、論争の一方の立場をなした。これに対して、紀元前五世紀